

# Iconographic Characteristics of Wrathful Deities and God of Wealth of the Pala Dynasty

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Mori, Masahide メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00001068">https://doi.org/10.24517/00001068</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



名古屋大学古川総合研究資料館報告  
Bull. Nagoya Univ. Furukawa Museum  
No. 6, 69-104, 1990

パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴

Iconographic Characteristics of Wrathful Deities and  
God of Wealth of the Pāla Dynasty

森 雅 秀 (Masahide MORI)

名古屋大学文学部印度哲学史研究室  
Department of the History of Indian Philosophy, School of Letters,  
Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464-01, Japan

名古屋大学古川総合研究資料館報告  
Bull. Nagoya Univ. Furukawa Museum  
No. 6, 69-104, 1990

## パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴

Iconographic Characteristics of Wrathful Deities and  
God of Wealth of the Pāla Dynasty

森 雅 秀 (Masahide MORI)

名古屋大学文学部印度哲学史研究室  
Department of the History of Indian Philosophy, School of Letters,  
Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464-01, Japan

### Abstract

Tantric Buddhist art was distinguished in Bengal, Bihar and Orissa in the era of the Pāla dynasty (755-1165 A. D.). We describe the iconographic characteristics of the tantric deities belonging to the groups of wrathful deities (*herukas* and *dharmapālas*) and wealth god. The names of the deities, with which we deal in this article, are as follows: Caṇḍamahāroṣaṇa, Trailokyavijaya, Mahākāla, Yamāntaka, Vajrahūmkāra, Samvara, Hayagrīva, Heruka, Hevajra, Hayagrīva as an attendant, Jambhala. In later, the following archaeological and iconographic information is given in tables: location, bibliographical source, date, material, size, attribute, garment, ornament, posture, vehicle and supplemental remarks.

### 1. 序

北東インドのガンジス河流域に栄えたパーラ朝は、西暦755年 Gopāla によって建国され、約四百年間存続した後、1165年に滅亡した。その版図は現在のベンガル、ビハール両州を中心とし、時にはオリッサやアッサム地方にもおよんだ。周辺のセーナ朝、プラティハール朝、あるいは多くの群小国家と常に勢力争いをくりひろげ、この地の覇権を競った。

パーラ朝の代々の王は仏教の保護に熱心であった。当時の仏教はかつての全インド的な勢力をすでに失い、カシミールやベンガルなどの北インドの一部の地域で信仰されていたにすぎなかった。

---

1990年10月29日受付  
1990年11月6日受理

パーラ朝の王たちは仏教国教政策をとり、特にパーラ朝の初期にはナーランダ僧院の再建やヴィクラマシーラ、オーダントプリ、ソーマプリなどの大僧院の建立が国家事業として行われた。このような国家的な経済支援のもとで大僧院を中心としたインド仏教の最後の興隆をみ、ここに独特の様式をもった仏教美術が生まれた。この様式は王朝名をとってパーラ様式、あるいは類似の様式を持つセーナ朝などのヒンドゥー教美術も含めてパーラ・セーナ様式とよばれる。パーラ様式はインド仏教の重要な美術様式に数えられるばかりでなく、周辺のネパールやチベット、東南アジアの国々にも多大な影響を与えた。

インド仏教史からみれば、パーラ朝の仏教はいわゆる密教（仏教タントリズム）に含まれる。密教の流行には大僧院に所属しない在野の修業者の存在も無視できないが、美術作品に関しては経済的基盤の確立した僧院内での制作が圧倒的であったことが予想される。当時の遺品のほとんどは大僧院跡から出土している。主な出土地としては、ビハール州の Gaya, Bodh Gaya, Nālanda, Kurkihār、ベンガル州では Pehārpur, Vikramapur など、オリッサ州では Ratnagiri や Lalitagiri があげられる。

パーラ朝美術の作品の中心は、黒く光沢のある玄武岩を使った尊像彫刻である。Goetz はパーラ様式を三期にわけている（1966 : 2933 ; 宮治 1981 : 146-7 も参照）。これによれば、前時代の影響を受け、豊満でシンプルな人体構造を特色とする初期、豪華な衣装や装身具をつけ、優美さと躍動感、荘厳さをそなえた9世紀から10世紀の中期、そして、繊細な表現、誇張された動きや姿勢を感じさせる11世紀以降の後期である。中期以降は、一つの作品中の基壇部・中央の人物群・上部の飾りという三つの区分が明確になる。光背も、上部が丸い初期から装飾の増加した中期、装飾過多で先端のとがった後期へと変化する。

パーラ朝の仏教美術に関する研究は、これまで主に美術史・考古学・仏教学の三つの分野の研究者たちによって行われてきた。第一の研究としては、仏教美術研究の大家 Foucher の著作（1900-1905）を嚆矢とする。初期の研究者の一人である Bhattasali も博物館のスタッフであった（Bhattasali 1929）。最近刊行された Huntington の著作（1984）も、考古学的な成果を取り入れているが、この分野に位置づけられるであろう。第二の考古学的アプローチとしては Banerji（1981）や Mitra（1981, 1983）の研究が代表的である。日本人の研究としては佐和隆研氏を代表とする調査隊も忘れてはならない（佐和 1982）。第三の仏教学者による研究は、密教図像に関する文献の校訂者として知られる Bhattacharyya, B. の研究（1968）が出発点となる。同じ流れに、Mallmann（1975 etc.）、Bhattacharyya, D. C.（1974, 1978）、Meisezahl（1980）などが含まれる。

最近の研究動向としては、これらの三つの分野を統合しようとする趨勢がみられる。それと平行

して、様式研究をベースとしながら、各作品の図像解釈学的な研究へと向かう動きもある。しかし、いずれの場合であっても、そのための準備段階としてパーラ朝の造形美術の全体像を把握する必要がある。すなわち、現存する作品にどのようなものがあるのか、それらがいかなる特徴をもっているのかを明確にしなければならない。

ところで、密教ではすべての仏教の神々（尊格）を包摂する仏教パンテオンが形成された。パンテオンの内部では神々のヒエラルキーが定められている。頂点には仏が位置し、菩薩、女尊、護法尊がこれに続く。最下位にはヒンドゥー教起源の神々や夜叉・羅刹などの雑多な神々がおかれる。仏には時代が下ると伝統的な仏（顕教仏）の他に、守護尊とよばれる神々が加わる。修業者の守り本尊である守護尊には秘密集会（Guhyasamāja）、ヘーヴァジュラ（Hevajra）、カーラチャクラ（Kālacakra）などがあげられる。菩薩を代表するのは観音（観自在）と文殊であろう。作例としては弥勒や金剛手なども散見される。女尊は単独で信仰される場合と仏の配偶神として扱われる場合とがある。護法尊は仏や菩薩など上位の神々や仏教の教えそのものを守る役割を持つ。

ここでは、守護尊、護法尊、そして雑尊の中に含まれる財宝神の三種の尊格をとりあつかう。守護尊と護法尊は、複数の顔や腕をもつ多面多臂像であることや忿怒の表情、持物として武器を手にする点など図像的に共通する要素が多い。護法尊が時代や流派によって守護尊になったり、その逆のケースもしばしばある。財宝神も護法尊との結びつきが深い。あるいは、護法尊の中で財宝をつかさどる富の神の性格を持ったものが財宝神に分類されるようになったといった方が妥当かも知れない。

パーラ朝の仏教美術作品の中でこれらの尊格が占める割合は決して大きいものではない。特に守護尊は秘密仏ともよばれるように、瞑想や灌頂などの秘儀的な場面で用いられ、一般の僧侶や信者への公開は制作の前提とされていなかったと考えられる。当時の美術作品の中で豊富な作例が残っているのは、菩薩（特に観音）、仏、女尊であり、その数は守護尊などとは比較にならないほど多い。しかし、守護尊や護法尊はパーラ朝の仏教、すなわち密教の時代になって初めて登場し、短期間のうちに仏教パンテオンの中の重要な位置を占めた尊格である。パーラ朝の仏教美術を密教美術として特色づける尊格たちであるといえることができる。

本研究は、これらの三種類のグループに関して、主としてインド国内の博物館に所蔵される造形作品、およびこれまでに出版された研究書や論文中の作品を網羅的に収集し、リスト化することから始められた。そして、各作品の具体的な特徴を明確にし、図像的な特徴にしたがって分類し、それによって尊名の同定作業を行った。これを通して、同一尊に比定される作品に共通してあらわれる一般的な特徴と、個々の作品に個別的にあらわれる特徴とがそれぞれ明らかとなった。これをまとめたものが次の第2章である。第3章では、現在知られている作品の主要なデータと図像的な特

徴を表の形で掲げた。末尾の写真図版には、典型的な特徴を示す作品の中でこれまで未発表のものを中心に紹介した。

## 2. 各尊の図像的特徴

各尊の特徴を以下に述べる。文中のNo. は、第3章のリストに対応する。すでにふれたように守護尊と護法尊の区分は必ずしも明りょうではない。ここでも両者は区別せずにあつかったが、一応の分類としてチャンダマハーローシャナ、マハーカーラ、ヤマータカ、ハヤグリーヴァの四尊を護法尊、それ以外を守護尊とすることは可能である。なお、配列は原語のサンスクリットの語順である。ただし、脇侍としてのハヤグリーヴァと財宝神ジャンバラは作例が多いため最後にまとめた。

### 2.1 チャンダマハーローシャナ (Caṇḍamahāroṣaṇa)

チャンダマハーローシャナには二つの作例がある。いずれも一面二臂で、右手は剣をふり上げ、胸に当てた右手には羂索 (pāśa) を持つ。この尊は、右ひざを立て左ひざを地面につけて蹴り上げるような独特なポーズをとる。左右が逆になることもある (No. 2)。この姿勢はチベットやネパールのチャンダマハーローシャナ像にもみられる (立川 1987: 130)。髪は髮髻冠 (jaṭāmakuta) で、No. 1 では大きな円形の耳飾りを付ける。

### 2.2 トライローキヤヴィジャヤ (Trailokyavijaya)

トライローキヤヴィジャヤは、後でふれるヴァジュラフーンカーラと教学上は同一の尊格とみなされるが、図像的にはヴァジュラフーンカーラが一面二臂であるのに対し、こちらは四面八臂である。これらの尊格の比定の根拠となるのが「降三世印」と呼ばれる印 (mudrā; 印契) である。この印は、右手に金剛杵、左手に金剛鈴を持ち、両手の小指をからめて甲を合わせ、ひとさし指を立てて作る。それ以外の手の持物をNo. 1 にしたがって述べれば、右手に剣、棍棒 (?), 矢 (?) を、左手に円盤、弓、羂索を持つ。No. 2 は腕の欠損が多いため降三世印以外には左手の弓と羂索しか確認できない。No. 3 (図1) は上半身が破損しているが、矢と羂索が残っている。

そのほかの特徴をNo. 1 で紹介すると、頭部には髮髻冠に宝冠を飾り、化仏の姿がみえる。額には三眼がある。装身具としては耳飾り、首飾り、聖紐 (yajñopavīta)、臂釧、腕釧等で豪華に飾られる。この尊格の作例に共通してみられる独特の装身具として、仏坐像をつないだ大きな環があり、肩からひざまで垂れている。足の姿勢は、右ひざを曲げ左ひざをのばす展左 (pratyālīḍha) で、足の下には二人の人物が踏みつけられている。ヒンドゥー教の神マハー

シュヴァラ（むかって右）とウマーに比定される。

No. 2はNo. 1とは様式がかなり異なるが、主要な特徴は共通である。台座の左右に象が表現されている。

No. 3（図1）はNo. 1に様式的にきわめて近い。足の下のヒンドゥー神の持物に金剛杵と三叉戟が確認できる。台座にはここでも両端に象がおかれ、その間には人物群、動物、魚などが彫られている。

### 2.3 マハーカーラ (Mahākāla)

マハーカーラの特徴は胸の前に持ったカパーラ (kapāla; 頭蓋骨でできた杯) である。臂釧や腕釧などの装身具が蛇でできていること、人間の生首をつないで作った大きな環を首に懸けることもすべての作例に共通してみられるが、これらは護法尊の一般的な装身具である。髪は炎のように逆立った炎髪で忿怒の形相をする。

No. 1（図2）は三面六臂、No. 2は一面四臂、No. 3は一面二臂と一定しない。足の姿勢も展右 (ālīḍha) と展左の両者があらわれる。

### 2.4 ヤマータカ (Yamāntaka)

ヤマータカには三点の作例がある。いずれもそれぞれ異なった特徴をそなえる。

Nālanda から出土したNo. 1（図3）は六面六臂、そして足の数も六本である。展左で水牛の上に乗る。持物は右手に金剛杵と剣、左手に羂索とカパーラが確認できる。羂索を持つ手はひとさし指を立てる期剋印 (tarjanī) という形を作る。体型は、背が低く肥満体で腹が突き出ている。装身具がここでも蛇でできている。人頭の環も首にかける。

No. 2は一面二臂で Mitra (1983) は黒ヤマーリ (Kṛṣṇayamāri) に比定する。右手に剣、左手に羂索を持つ。No. 1のところで述べた装身具のうち、人頭の環はつけない。額には第三の眼が垂直に刻まれている。展左で水牛に乗る点はNo. 1と同じである。

No. 3は三面六臂、足の数は二本である。腕の破損が多く、残った二本には剣と羂索を持つ。足の下に乗物は動物のようであるが写真からは確認できない。身体的特徴や装身具はNo. 1に一致する。

### 2.5 ヴァジュラフーンカーラ (Vajrahūṃkāra)

二例あり、いずれも類似の図像的特徴を持つ。一面二臂で、すでに述べたように両手は降三世印を結ぶ。足の下的人物もトライローキヤヴィジャヤと同じく、マヘーシュバラとウマーで

あると考えられる。

## 2.6 サンヴァラ (Samvara)

サンヴァラ（あるいはチャクラサンヴァラ）は、守護尊、護法尊の中でヘールカと並んで作例の豊富な尊格である。代表的な作例と考えられるNo. 7（図4）にしたがって共通点から述べる。

三面十二臂で、それぞれの手に特徴的な持物を持つ。主要な二臂を胸の前で交差させて金剛杵と金剛鈴を持つ。残りの腕はからだの左右に扇状にのびている。一番上の二臂で象の皮を持つ。象の皮は背中に広げられ、下の腕のさらに下からその足がのぞく。これ以外の持物は、上から順に右手にダマル太鼓、斧、カルトリ (kartri; 曲刀)、三叉戟、左手にカトヴァーンガ (khatvāṅga; 先端に髑髏をつけた棒)、絹索と金剛杵、ブラフマー (Brahmā; 梵天) の頭である。ブラフマーの頭は、ヒンドゥー図像学の伝統にしたがい、四方に顔を持った形で表現される。

髪型は他の尊格にもみられる髪髻冠であるが、金剛杵を十字に組み合わせた二重金剛杵 (viśvavajra; 羯摩杵) と半月とを正面につけるのがサンヴァラの特徴である。髑髏のついた冠も付ける。装身具には首飾り、臂釧、腕釧があり、腰には鈴をいくつか垂らす腰飾りを巻く。いずれも手の込んだ豪華の装身具である。首には人頭の環も懸ける。展右の姿勢で立ち、足の下にはヒンドゥー教の神バイラヴァ (Bahairava) とカーラートリ (Kālarātri) が踏まれる。

なお、この作例では面数は三面であるが、これは浮彫りであるため背後の面が表現されなかったと考えられる。背面も表現された彫像などでは四面であらわされている (Nos. 1, 4-6)。

次に各作例に固有の特徴について。

No. 1は頭頂に化仏をおく。No. 2はNo. 7に酷似した作品であるが台座の表現が異なり、台座中央に供養者の姿が表現される。No. 3（図5）では足の下にヒンドゥー神が表現されず、かわってサンヴァラのまわりに四人の女尊が小さく表現されている。いずれも一面四臂で、右手にダマル太鼓とカルトリ、左手にカパーラとカトヴァーンガをもち、展右の姿勢で立つ。台座部には仏伝図と思われる浮彫りがある。No. 4はサンヴァラの全作例中、唯一の展左像である。一般に守護尊は展右、護法尊は展左の姿勢をとることが多い。Schroederによれば、この作品には一部彩色がほどこされている。No. 6のサンヴァラは主要な二臂で女尊を抱く。サンヴァラの明妃ヴァジュラヴァーラーヒー (Vajravārāhī) と考えられる。



## 2.7 ハヤグリーヴァ (Hayagrīva)

ハヤグリーヴァは、後でふれるように観音(観自在)の脇侍として作られることが圧倒的に多い。ここで紹介する唯一の作例(図6)も現在では単独の作品として残されているが、もともとそうであったのか、脇侍として制作されたのか明らかではない。

左ひざを立て、遊戯坐(līlāsana)に似たかたちで腰をおろし、右腕を杖のようなものの上におく。左腕は曲げて左ひざにのせる。髪は逆立ち、三眼、あごひげをそなえる。装身具は、ビーズ状の瓔珞以外はすべて蛇でできている。座や乗物はない。

## 2.8 ヘールカ (Heruka)

ヘールカはパーラ朝の守護尊の中でもっとも作例が多く、九点を数える。作例相互で図像上の変化はほとんどない。

ヘールカの特徴は、右足を上げ左足をやや曲げ、右手を上げる独特の舞踊の姿勢にある。右手には金剛杵を持ち、左手は胸の前でカパーラを保つ。左脇にはさらにカトヴァーンガをかかえる。ただし、腕の破損した作例が多く、両方の持物が確認できるのは、わずかな作例(Nos. 2-4)にすぎない。足の下には死体を踏みつけている。炎髪で三眼をそなえ忿怒の形相をする。サンヴァラと同じように、首飾りや臂釧や腕釧などの豪華な装身具と、人頭をつないで作った大きな環を身につける。多面多臂像の多い守護尊、護法尊の中で、ヘールカは一面二臂のきわめて「人間的な」形態をしている。

No. 1はヘールカの作例としてしばしば紹介されてきたすぐれた作品である。炎髪の中に化仏の姿が見える。他の作例に共通してみられる足の下での死体がここでは表現されていない。No. 5(図7)には背景に小さな六尊の女尊が表現されている。いずれもヘールカと同じ姿をしている(ただしこの作品のヘールカは下半身が欠損し、腕などにも破損が多い)。Nos. 6, 9は奉献塔基壇部の龕の中にある浮彫りである。

## 2.9 ヘーヴァジュラ (Hevajra)

ヘーヴァジュラには作例が三点ある。面数は写真からは性格には判断できないが、四つないし五つである。臂数はいずれも十六臂である。これらの手はすべてカパーラを持ち、その中に動物や人間などが入っている。同時代の文献である『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī* 第8章(Bhattacharyya 1972: 20)によれば、これらのカパーラの中に入っているのは象、馬、ろば、牛、駱駝、人間、猿、ふくろう(以上、右)、プリティヴィー、ヴァルナ、ヴァーユ、テージャス、チャンドラ、アーディトヤ、ヤマ、ダナダ(以上、左)であるという。プリ

ティヴィー以下はすべてヒンドゥー教の神々である。No. 1 (図8) は足の数が明らかではないが、No. 2とNo. 3はいずれも四本で、前のびと組みがヘールカと同じような舞踊形を、後ろのひと組が展左をとる。No. 1とNo. 2は明妃ナイラトマー (Nairātmā) を抱き、No. 3ではヘーヴァジュラのまわりに八尊の女尊が表現されている。装身具は女尊に隠れているため明りょうではないが、臂釧、腕釧、足輪、それに加えて人頭の環が確認できる。

## 2.10 脇侍としてのハヤグリーヴァ

観音 (あるいは観自在 Avalokiteśvara) の脇侍にハヤグリーヴァがおかれることがある。仏教パントオンの中での観音の人気の高さを反映して、このような作例は30点近くにもおよぶ。これは、同時代の観音の作例の豊富さに比例している。

脇侍としてのハヤグリーヴァは、中尊の観音の種類に応じて少しずつ異なる図像的特徴を持つ。いずれの場合も中尊の左側に小さく表現され、多くは右手を上にあげ、左手を杖の上におく。両手を杖の上におく場合もある。また、原則として中尊が立像の場合はハヤグリーヴァも立像、坐像の場合は坐像で表現される (例外としてNos. 11, 27)。

ハヤグリーヴァを脇侍とする観音の代表がカサルパナ (Khasarpaṇa) 観音である。この観音はターラー (Tārā)、スダナクマーラ (Sudhanakumāra)、ブリクティー (Bhṛkūṭī)、ハヤグリーヴァの四尊を脇侍とし、立像の場合、ハヤグリーヴァは中尊とブリクティーにはさまれた形で登場する (図9)。また、カサルパナ観音が坐像の場合、中尊の左、あるいは台座の部分にひざを立てて座る (図10, 11)。ただし、立像の作例も一例だけある (No. 11)。

中尊が不空罽索 (Amoghapāśa) 観音の場合にもハヤグリーヴァは登場する。やはり観音の左側におかれるが、二臂の他に四臂のこともある (Nos. 16, 19, 20)。四臂の場合、ひと組みの手は二臂の場合と同じように右手を上へ左手を杖の上におき、もうひと組みの手は胸の前で組むか (図12)、交差させる。中尊の観音が左手をハヤグリーヴァの頭におくこともある (Nos. 19, 20)。

これら二種類以外の観音の作例にも脇侍としてハヤグリーヴァが表現されることがあるが、いずれも一面二臂で基本的な特徴は同じである。一例だけ罽索を持つものがある (No. 26)。

## 2.11 ジャンバラ (Jambhala)

ジャンバラと考えられる作例は30点近くにおよぶ。しかし、このうちの何例かはクベーラ (Kubera) やパンチカー (Pañcikā) などの別の財宝神である可能性もある。

ジャンバラは富の神にふさわしくよく太り、大きな腹をした姿で表現される。ほとんどの場

合、遊戯坐のポーズで坐るが、賢坐 (bhadrāsana) のこともある (Nos. 17, 21-23)。ジャンバラの特徴は両手の持物にある。右手に樹果 (シトロンの実といわれる) を、左手にはマンガースを持つ (図13, 14)。マンガースは口から宝石を吐き出している。マンガースは財宝神の持物としてしばしばあらわれる動物である。左手に蓮華を持つ作例も多いが、同時にマンガースも持っているかどうかは明らかではない。ジャンバラの作例は一般に腕の欠損が多く、持物の判明しないものが多い。また、台座の部分につぼが浮彫りにされるものがいくつかみられるが、これも財の象徴と考えられる。

装身具には首飾り、瓔珞、臂釧、腕釧、足輪が一般にみられ、髪型は髪髻冠を結うことが多い。化仏をのせた作例もある。

### 3. 作例リスト

#### 注記

1. 以下にあげるのは、パーラ朝の守護尊、護法尊、財宝神の作例とその主要なデータのリストである。
2. 各項目の内容については以下のとおりである。
  - (No.) 同一尊に比定されるものを一つの表にまとめ、これに番号を付した。
  - (所蔵・所在) 作品を所蔵する博物館名や個人名をあげる。また、発掘地等にある場合は「現地」とし、括弧内にその地名をあげる。博物館の資料番号がわかっているものにはこれも付す。
  - (出典) 出版されている書籍・論文等に掲載された作品には、その出典として著者名、発行年、図版番号の順に列挙する。図版番号を示すPl. やFig. 等の表記は原著にしたがった。「76YM」「MY 83」で始まる数字は、名古屋大学文学部助教授宮治昭氏と名古屋芸術大学教授山田耕二氏による写真資料の整理番号である。この資料は名古屋大学古川総合研究資料館美術史考古学室に保管されている。
  - (出土地) 空欄は出土地が不明であることを示す。
  - (データ) 制作年代、材質、大きさをあげる。括弧内はデータの出典を示す。大きさの単位 (cm, inch) は統一せず原著にしたがった。
  - (頭飾等) この欄には、頭髪、顔の特徴、頭部周囲の装飾品 (宝冠や耳飾りなど) をあげる。
  - (面数)(臂数) 顔の数、腕の数を示す。
  - (持物) 多臂像の場合、胸の前などにおかれる主要な二臂の持物をまずあげ、残りは上から順に列挙する。括弧内の説明は、その上段の持物を持つ特徴 (印や位置) を補ったものである。
  - (装身具等) 衣装、装身具などをあげる。身体的特徴や体型についてもここで扱う。
  - (足) 足の数を示す。
  - (姿勢) 坐法や脚勢を示す。
  - (座) 尊像の座の部分に関する記述である。「二重蓮華」は上下に方向に花卉を開いた蓮台を示す。「一重蓮華」はこれが一方向のみである蓮台を示す。
  - (乗物) 尊像が乗る動物などの乗物 (vāhana) や踏みつけられる人物などをあげる。括弧内の右、左は、それぞれ右足の下、左足の下であることを示す。
  - (脇侍) 複数の尊像から構成された作品の場合、主尊のまわりにおかれる脇侍や配偶神などに関して述べる。「3.10 脇侍としてのハヤグリーヴァ」では、かわりに主尊の名称をあげる。
  - (備考) 光背や台座に関する記述や、銘文の有無、欠損部などこれまでの項目には含まれない特徴をあげる。
3. 「？」は判別できないことを示す。「-」は欠損を示す。台座や乗り物の項目にあらわれる「なし」は、それらが表現されていないことを表し、欠損を表すのではない。
4. 頭飾、持物、装身具、姿勢などの図像的特徴の説明は (逸見 1935 : 153-375) 参照。

3.1 チャンダマハーローシャナ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	現地(Ratnagiri)	Mitra 1981 Pl. LXXIII(A)	Ratnagiri		髮髻冠 耳飾	1	2
2	不明	頼富 1985 p. 90	Vikramasīla		髮髻冠	1	2

3.2 トライローキヤヴィジャヤ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Mohant's Compound, Bodh Gaya	Foucher 1900-1905 Fig. 4 Huntington 1984 Pl. 110 Mallmann 1964 Fig. 7 Mallmann 1975 Pl. XX-2	Bodh Gaya, Dt. Gaya, Bihar	c. 10 c (Huntington)	髮髻冠 宝冠 化仏 三眼 耳飾	4	8
2	Patna Mus #8457	Gupta 1965 Pl. XXIII Huntington 1984 Pl. 170 Schroeder 1981 Pl. 59B Sinha 1983 Pl. 39 76YM 小109-5	Nālandā, Dt. Patna, Bihar	850-950 AD (Schroeder) c. 10 c (Huntington) 7 c (Gupta) Bronze 25.4 cm ht.	髮髻冠	4	8
3	Nālandā Mus	76YM 大62-3 [図1]			—	—	—

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
剣	羂索	首飾 ドーティ	2	右膝を立て左膝を地面につける	二重蓮華?	なし	なし	奉獻塔基壇部の龕中の浮彫。
剣	羂索	首飾 ドーティ	2	左膝を立て右膝を地面につける	なし	なし	なし	

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
金剛杵 (降三世印) 剣 棍棒? 矢?	鈴 円盤 弓 羂索	首飾、聖紐、 臂釧、腕釧、 ドーティ 足輪 仏座像の環	2	展左	なし	人物	なし	火炎光背。 正面の顔は表面が欠損している。 乗物はウマー(右)とマヘーシュヴァラ(左)(以下の作例においても同じ)
金剛杵 (降三世印) — — —	鈴 — 弓? 羂索?	首飾、臂釧、 腕釧、聖紐、 ドーティ、 仏座像の環	2	展左	一重蓮華	人物	なし	台座の左右に象が表現される。
矢	羂索	ドーティ、 足輪 仏座像の環 (五仏の座像)	2	展左	二重蓮華	人物	なし	上半身欠損。 火炎光背。 乗物の二神(ウマーとマヘーシュヴァラ)はいずれも右手に金剛杵、左手に三叉戟を持つ。 足の回りに剣と楯を持った人物が二人表

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂

### 3.3 マハーカーラ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Patna Mus	佐和 1982 Pl. 74 Benisti 1981 Fig. 140 Mitra 1983 Pl. CCCXXVII(C) 76YM 小101-24 76YM 大60-3 〔図2〕	Ratnagiri	8 c(銘による)	炎髪 鬘髻冠 忿怒相 耳飾	3	6
2	個人蔵 (Collection of Mr. P. C. Nahar)	Banerji 1933 Pl. LV(c)	Dt. Dinajpur		炎髪 耳飾 忿怒相	1	4
3	Sarnath Mus	MY83 小140-23			炎髪	1	2

### 3.4 ヤマーンタカ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Nalanda Mus	Banerji 1933 Pl. XL(c) 頼富 1985 p. 106 76YM 小111-16 〔図3〕	Nalanda		炎髪 鬘髻冠 耳飾 あごひげ 忿怒相	6?	6

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
								現される。 台座の左右に象、その間に人物群が表現される。

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
— 数珠? 劍	カパーラ (胸の前) — —	首飾、蛇の 臂釧と腕釧、 人頭の環 鼓腹	2	展右	一重蓮華	人物	人物	足の下の人物と脇侍の四尊は破損のため詳細は不明。 脇侍はカパーラを待つ
— 劍	— —	首飾、瓔珞、 聖紐、 ドーティ、 人頭の環、 足輪 鼓腹	2	展左	二重蓮華	なし	なし	船形の火炎光背。 台座の中央に三つの人頭の浮彫。 台座の左右には二人の人物の浮彫。
カパーラ (胸の前)	—	蛇の臂釧と 腕釧、聖紐 鼓腹	2	展左	同一方向 に花卉を 開く二重 蓮華	人物	女尊	脇侍の女尊は頭部を欠く。 両端に二人の供養者。左上方に華鬘を持った飛天。 台座部に二つの壺の浮彫と銘がある。

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
? 金剛杵 劍	絹索を持ち 期剋印 カパーラ 人頭?	蛇の首飾、 臂釧、腕釧、 足輪、人頭 の環、ドーティ 鼓腹、短軀	6?	展左	なし	水牛	なし	火炎光背。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
2	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCXCV(A)	Ratnagiri		炎髪 鬘髻冠 三眼 忿怒相 耳飾	1	2
3	現地(Ratnagiri)	Sahu 1958 Pl. 35 Mitra 1983 Pl. CCCXXXIII(B) 佐和 1982 Pl. 33	Ratnagiri		炎髪 鬘髻冠		

### 3.5 ヴァジュラフーンカーラ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Orissa State Mus	Mitra 1978 Pl. 76	Achtraipur, Dt. Orissa	10 c 後半 47.3 cm ht.	髮髻冠 忿怒相 冠帛	1	2
2	New Delhi Mus	Saraswati 1977 Pl. 178	Bihar?	c. 11 c (Saraswati)	髮髻冠 忿怒相	1	2

### 3.6 サンヴァラ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Indian Mus A24365, 4552	Bandhyopadyay 1981 Pl. 31 Banerji 1933 Pl. XXXVII(C) Huntington 1984 Pl. 195 Huntington 1985 Pl. 18, 22 Schroeder 1981 Pl. 66D	Patharghata, Dt. Bhagalpur Bihar	Metal c. 11 c(Huntin- ton 198) 10 c (Schroeder) 15.5 cm ht.	髮髻冠 二重金剛 三眼 耳飾 三日月	4	12



持物（右）	持物（左）	装身具等	足	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
劍	絹索を持ち期剋印	首飾、聖紐、 臂釧、腕釧、 足輪、ドーティ 鼓腹、短軀	2	展左	一重蓮華	水牛	なし	MitraはKṛṣṇayamā- ariとする。
— — 劍	絹索を持ち期剋印 —	首飾、聖紐、 臂釧、腕釧、 足輪、 人頭の環、 鼓腹、短軀	2	展左	二重蓮華	動物	なし	SahuはVajrajvāla- analārkaとするが、 根拠とする成就法 は作例と一致しな い。

持物（右）	持物（左）	装身具等	足	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
金剛杵 （降三世印）	鈴	臂釧、腕釧、 ドーティ	2	展左	なし	人物	なし	円形の火炎光背。 乗物はウマー（右） とマヘーシュヴァ ラ。
金剛杵 （降三世印）	鈴	首飾、臂釧、 聖紐、 ドーティ	2	展左	なし	人物	なし	Saraswatiは乗物を PārvatīとSivaにす る。 火炎光背。

持物（右）	持物（左）	装身具等	足	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
金剛杵 （胸の前で交差） 象の皮 ダマル 斧 カルトリ 三叉戟	鈴 髑髏棒 カパーラ 絹索と 金剛杵 梵天の頭	首飾、聖紐、 人頭の環、 ドーティ	2	展右	一重蓮華	人物	なし	Indian Mus, Bhan- dhyapadyay, Bane- rjiはTrailokyavi- jayaとする。 乗物の人物はバイラ ヴァとカーララート リ（以下の作例にお いても同じ）。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
2	Patna Mus Acc. No. 6505	Benisti 1981 Fig. 139 Mitra 1983 Pl. CCCXXVII(A) 佐和 1982 Pl. 75 76YM 小101-18 76YM 大59-15	Ratnagiri	124.5 cm ht. 8cの銘(佐和)	髮髻冠 二重金剛 半月 三眼 髑髏冠 耳飾	3 (4)	12
3	Indian Mus	76YM 小119-21 76YM 大66-10 76YM 小119-18 (図5)			髮髻冠 髑髏冠 三眼	3 (4)	12
4	Pan-Asian Collection	Schroeder 1981 Pl. 70D		12 c (Schroeder) 13 cm ht. brass	髮髻冠 二重金剛 髑髏冠 三眼 耳飾	4	12
5	British Mus 1976-27.1	Schroeder 1981 Pl. 73B		12 c (Schroeder) 15.2 cm ht. brass	髮髻冠 二重金剛	4	12

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
金剛杵 (胸の前で交差) 象の皮 ダマル 斧 カルトリ 三叉戟	鈴 鬘腰棒 カパーラ 絹索と 金剛杵 梵天の頭	首飾、臂釧、 腕釧、足輪、 人頭の環、 腰飾り ドーティ	2	展右	二重蓮華	人物	なし	火炎光背。 上部左右に二人、台 座中央に一人、合計 三人の供養者が表現 される。 Patna MusはTrai- lokyavijayaとする。
金剛杵 (胸の前で交差) 象の皮 ダマル 斧 カルトリ 金剛杵	鈴 カパーラ 絹索 梵天の頭 鬘腰棒	首飾、臂釧 腕釧、聖紐 足輪、腰飾 ドーティ	2	展右	二重蓮華	人物	四人 の女 尊	火炎光背。 脇侍の女尊は中尊の 頭上に一人、足元に 三人小さく表現され る。いずれも一面四 臂で展右の姿勢。 持物は右手がダマル 太鼓とカルトリ、左 手がカパーラと鬘腰 棒。上部左右に二人 の供養者。台座に仏 伝浮彫(誕生、灌水 成道?)。
金剛杵 (胸の前で交差) 象の皮 ダマル カルトリ 斧 三叉戟	鈴 絹索と 金剛杵 カパーラ 梵天の頭 -	首飾、臂釧 腕釧、瓔珞 腰飾、足輪 人頭の環、 ドーティ	2	展左	二重蓮華	人物	なし	唯一の展左の作例。 頭飾には赤い彩色が ほどこされる。
金剛杵 (胸の前で交差) 象の皮 ダマル 斧 カルトリ 三叉戟	鈴 鬘腰棒 カパーラ 絹索と 金剛杵 梵天の頭	首飾、臂釧 腕釧、腰飾 足輪、 人頭の環、 ドーティ	2	展右	二重蓮華	人物	なし	

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
6	個人蔵 (Collection of Mr. & Mrs. James W. Alsdorf, Chicago)	Schroeder 1981 Pl. 66c		10 c (Schroeder) 7.8 cm ht. Bronze	髮髻冠 二重金剛	4	12
7	New Delhi Mus	MY83 小122-24 MY83 小122-25 〔図4〕			髮髻冠 耳飾	3	12

### 3.7 ハヤグリーヴァ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Patna Mus No. 9787	Bandhyopadyay 1981 Pl. 38 Huntington 1985 Pl. 18. 23 Gupta 1965 Pl. XXXIII Sinha 1983 Pl. 38 Schroeder 1981 Pl. 62A 中村 1980 Pl. 6-49 〔図6〕	Kurkihar, Dt. Gaya, Bihar	c. 11 c (Huntington) 10 c (Schroeder) 12 c (Gupta) Gilt Copper 10 cm ht.	炎髪 三眼 あごひげ 耳飾	1	2

### 3.8 ヘールカ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Dacca Mus #47	Bhattachali 1929 Pl. XII Huntington 1984 Pl. 215	Subhapur, Dt. Comilla Bengal	11c 前半 (Huntington) black stone 16.5 cm ht.	炎髪 化仏 冠帛 忿怒相	1	2

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
金剛杵 (胸の前で交差 させ明妃を抱く) 象の皮 ダマル 斧 カルトリ 三叉戟	鈴 髑髏棒 カパーラ 絹索と 金剛杵 梵天の頭	首飾、臂釧、 腕釧、腰飾 足輪、 人頭の環、 ドーティ	2	展右	一重蓮華	人物	明妃	明妃(Vajravārāhī) は右手にカルトリ、 左手は男尊の肩にま わす。 SchroederはCakra- samvaraとする。
金剛杵 (胸の前で交差) 象の皮 ダマル 斧 カルトリ -	鈴 髑髏棒 絹索と 金剛杵 梵天の頭 カパーラ	首飾、臂釧、 腕釧、腰飾、 人頭の環	2	展右	二重蓮華	人物	なし	光背の上部左右に二 人の供養者。 台座には二人の供養 者と蔓草模様が浮彫 にされる。 No. 1の作品に酷似す る(台座部分を除 く)。

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
なし	なし	蛇でできた 首飾、臂釧、 腕釧、足輪、 聖紐、瓔珞	2	遊戯坐	なし	なし	なし	単独尊であったかは不明

持物(右)	持物(左)	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
-	鈴のつい た髑髏棒 (脇にか かえる)	首飾、瓔珞、 臂釧、腰飾、 足輪、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	二重蓮華	なし	なし	火炎光背。 右腕、左肘、左足の 一部が欠損。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
		Huntington 1985 Fig. 18.13					
2	個人蔵 (Kunsthandel, J. Polak, Amsterdam)	Schroeder 1981 Pl. 70H		12 c (Schroeder) brass 11.4 cm ht.	炎髪 三眼 忿怒相	1	2
3	Orissa State Mus Acc. No. 296		Achtraipur, Orissa	11 c (Mitra)	炎髪 三眼	1	2
4	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCCXXXVI(B) Sahu 1958 Fig. 38 佐和 1982 Pl. 23	Ratnagiri Monastery 1		炎髪 冠帛 忿怒相	1	2
5	Nalanda Mus	76YM 小110-32 76YM 小110-33 76YM 大69-9 Saraswati 1977 Pl. 172 (図7)			炎髪 化仏 冠帛	1	2
6	現地(Ratnagiri)	Mitra 1981 Pl. LXXIII(B)	Ratnagiri		?	1	2
7	Sarnath Mus	Saraswati 1977 Pl. 171 MY83 小141-1		stone c. 10 c (Saraswati)	忿怒相	1	2
8	Indian Mus	Saraswati 1977 Pl. 173		stone c. 10 c (Saraswati)	炎髪 三眼 耳飾	1	2
9	現地(Ratnagiri)	Benisti 1981 Fig. 138	Ratnagiri			1	2

持物（右）	持物（左）	装身具等	足	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
金剛杵	カパーラ 髑髏棒 （脇にか かえる）	首飾、瓔珞、 臂釧、腕釧、 腰飾、足輪、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	二重蓮華	死体	なし	
金剛杵	カパーラ 髑髏棒 （脇にか かえる）	首飾、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	一重蓮華	死体	なし	独特の火炎光背。
金剛杵	カパーラ 髑髏棒 （脇にか かえる）	首飾、腰飾、 臂釧、腕釧、 足輪、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	一重蓮華	死体	なし	
—	—	首飾、腰飾、 臂釧、腕釧、 聖紐、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	二重蓮華	死体	六尊 の女 尊	右手、左腕、右足、 左足の一部が欠損。 脇侍の女尊は左右に 三人ずつ配され、い ずれも一面二臂半跏 の舞踊形をとる。持 物は金剛杵（右）と カパーラ、髑髏棒 （左）。
?	? 髑髏棒 （脇にか かえる）		2	半跏の舞 踊形	なし	?	なし	奉献塔基壇部の龕中 の浮彫。
—	— 髑髏棒	首飾、瓔珞、 足輪、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	一重蓮華	死体	なし	頼意 1993 は <i>Nairātmā</i> とする。
— 髑髏棒	—	首飾、瓔珞、 臂釧、腕釧、 足輪、 人頭の環	2	半跏の舞 踊形	一重蓮華?	死体	なし	火炎光背。 SaraswatiはNair- tmāとする。
?	? 髑髏棒 （脇にか かえる）		2	半跏の舞 踊形	なし	死体	なし	奉献塔基壇部の龕中 の浮彫。

3.9 ヘーヴァージュラ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Indian Mus A24305 12915	Huntington 1984 Pl. 202; 1985 Pl. 18. 14 76YM 小123-7 〔図8〕	Paharpur, Dt. Rajshahi Bengal	c. 12 c (Huntington) 7,5 cm ht. black stone	炎髪 鬘髻冠 忿怒相 三眼 耳飾	5	16
2	Philadelphia Mus of Art	Schroeder 1981 Pl. 66A		12 c (Schroeder) brass	炎髪 鬘髻冠 三眼 二重金剛 人の顔	4?	16
3	Rajmala Office Tippera State	Bhattasali Pl. L(a)	Dharmmanaga	11-12 c (Bhattasali)		4?	16

3.10 脇侍としてのハヤグリーヴァ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Bodh Gaya Mus	76YM 小114-16 〔図9〕			炎髪	1	2
2	現地(Nalanda)	Huntington 1984 Pl. 138	Nālandā	137 cm ht. black stone 11 c 後半- 12 c 前半 (Huntington)	炎髪	1	2



持物（右）	持物（左）	装身具等	足	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
カパーラ （はじめの二臂で 明妃を抱擁する）	カパーラ	臂釧、腕釧、	2?	半跏の舞 踊形	—	—	明妃	膝から下の部分は欠 損。
カパーラ （はじめの二臂で 明妃を抱擁する）	カパーラ	臂釧、腕釧、 足輪、 人頭の環	4	半跏の舞 踊形(前) 展左(後)	なし	複数 の人物	明妃	
カパーラ （胸の前で交差）	カパーラ	首飾、瓔珞、 腰飾、 人頭の環	4	半跏の舞 踊形(前) 展左(後)	二重蓮華	複数 の人物	八人 の女 尊	脇侍の女尊は中尊の 回りに配される。 いずれも一面二臂半 跏の舞踊形をとる。 持物はBhattasali p. 271 参照。 火炎光背。 蓮華をかたどった頭 光。光背の上部には Vairocana座像が表 現される。

持物（右）	持物（左）	装身具等	姿 勢	座・乗	脇 侍	備 考
（上にあ げる）	杖	首飾、聖紐 鼓腹、短軀	立像	なし	カサルパナ観自 在（立像）	中尊の左側。中尊と Bhr̥kuṭī との間に立 つ。
（上にあ げる）	杖	首飾、聖紐 鼓腹、短軀	立像	なし	カサルパナ観自 在（立像）	中尊の左側。中尊と Bhr̥kuṭī との間に立 つ。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
3	Nalanda Mus #00007	Huntington 1984 Pl. 137 76YM 小110-18	Nalanda	125 cm ht. black stone 11 c 後半 (Huntington)	炎髪	1	2
4	Indian Mus #A25200 9015	Huntington 1984 Pl. 243 MY83 小150-22 MY83 小150-24	Chowrapara, Dt. Rajshahi	114.4 cm ht. black stone 11 c 後半 12 c 前半	蛇でできた炎髪 耳飾	1	2
5	Indian Mus No. 3804	Banerji 1933 Pl. XXXIII(a) 76YM 小118-36 MY83 小149-32 〔図10〕〔図11〕			炎髪	1	2
6	Indian Mus	76YM 大67-15				1	2
7	Patna Mus	Gupta 1965 Arch. 1582 Pl. XIII 76YM 大61-1 76YM 小103-29				1	2
8	British Mus	Mallmann 1948 Fig. 4			炎髪	1	2
9	Archaeological Mus of Bengal	Huntington 1984 Pl. 237 Huntington 1985 Pl. 18. 8	Tapandigi, Dt. West Dinapur	black stone 105 cm ht. 11 c 後半- 12 c 前半	炎髪 耳飾 忿怒相	1	2
10	Indian Mus #N. S. 76	Huntington 1984 Pl. 75	Chandimau, Dt. Patna	black stone 42nd year of Ramapala (12 c 初頭)		1	2
11	Indian Mus	76YM 小119-3 MY83 小150-8 MY83 小150-9			編んだ髪		

持物 (右)	持物 (左)	装身具等	姿 勢	座・乗	脇 侍	備 考
(上にあげる)	杖	首飾、聖紐、鼓腹、短軀	立像	二重蓮華	カサルパナ観自在 (立像)	中尊の左側。中尊とBhrkuṭīとの間に立つ。
? (胸にあてる)	杖 (よりかかる)	首飾、聖紐、臂釧、腕釧、ドーティ	立像	二重蓮華	カサルパナ観自在 (立像)	中尊の左側。中尊とBhrkuṭīとの間に立つ。
(上にあげる)	杖 (左手をのせる)	首飾	坐像	二重蓮華	カサルパナ観自在 (坐像)	中尊の左側。左膝を立てた姿勢で坐る。
(両手を杖の上におく)			坐像	なし	カサルパナ観自在 (坐像)	台座の部分の四人の供養者の間に坐る。
(上にあげる)	(膝の上におく)		坐像	なし	カサルパナ観自在 (坐像)	脇侍の女尊(Bhrkuṭī?)の前、中尊の左側に坐る。中尊の膝に隠れて下半身は見えない。
(上にあげる)	?		坐像	一重蓮華	カサルパナ観自在 (坐像)	台座の部分の供養者などの間に坐る。
(上にあげる)	杖 (左手をのせる)	首飾、聖紐、足輪	坐像	二重蓮華	カサルパナ観自在 (坐像)	中尊の左側に坐る。
(上にあげる)	? (胸の前)		坐像	二重蓮華	カサルパナ観自在 (坐像)	中尊の左側に小さく表現される。
(上にあげる)	杖 (よりかかる)	首飾、聖紐、足輪、ドーティ	立像	なし	カサルパナ観自在(?) (坐像)	中尊の左下、台座に表現される。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
12	Sarnath Mus	76YM 小93-62			炎髪	1	2
13	Patna Mus	Huntington 1984 Pl. 84	Giriyek, Dt. patna	stone 53.5 cm ht. 42nd year of a unspecified era	炎髪或は 髪髻冠	1	2
14	現地(Ratnagiri)	佐和 1982 Pl. 7	Ratnagiri, Monastery 1	11 c ? (佐和)		1	4?
15	Indian Mus	MY83 小153-19			炎髪 耳飾	1	2
16	Patna Mus	76YM 小101-21 76YM 大59-13 〔図12〕			炎髪	1	4
17	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCCXL	Ratnagiri			1	2
18	British Mus	Foucher 1900-1905 Fig. 13	Dt. Maghada	22 cm ht.		1	2
19	現地(Ratnagiri)	佐和 1982 Pl. 27 Mitra 1983 Pl. CCCXLI(B)	Ratnagiri, Monastery 1			1	4
20	現地(Ratnagiri)	佐和 1982 Pl. 9 Benisti 1981 Fig. 154	Ratnagiri, Monastery 1	板石 190 cm ht.	忿怒相	1	4
21	Indian Mus No. Kr. 7	Banerji 1933 Pl. XIII(c)			炎髪	1	2
22	不明	Sahu 1958. Pl. 66				1	2?

持物(右)	持物(左)	装身具等	姿勢	座・乗	脇侍	備考
(上にあげる)	杖? (左手をのせる)	鼓腹	坐像	なし	カサルパナ観自在(坐像)	中尊の左側に左膝を立てて坐る。
(上にあげる)	(台に掌をつける)	首飾、聖紐、鼓腹	坐像	一重蓮華	カサルパナ観自在(坐像、腰から下は欠損)	中尊の左下、台座に表現される。右膝を立てて坐る。銘文あり。
(上にあげる?) (胸の前で組む)	?		展左	なし	不空羅索観自在 或は蓮華手観自在(立像)	中尊の左側に小さく表現される。
? (胸の前)	杖 (左手をのせる)	首飾、聖紐、臂釧	立像	なし	不空羅索観自在(立像)	中尊の左側。
(上にあげる) (胸の前で交差)	杖?		展左	二重蓮華	不空羅索観自在(?) (立像)	中尊の左側。
(上にあげる)	杖 (左手をのせる)		展左	二重蓮華	不空羅索観自在(?) (立像)	中尊の左側。
(上にあげる)	杖 (左手をのせる)	首飾、臂釧、ドーティ	立像	なし	不空羅索観自在(?) (立像)	全体の左側。
(上にあげる) (胸の前で組む)	?	鼓腹	立像	二重蓮華	不空羅索観自在(立像)	中尊の左側。 中尊は左の第二臂を頭上におく。
(胸の前で組む)		鼓腹	立像	なし	不空羅索観自在(立像)	中尊の左側。 中尊は左の第二臂を頭上におく。
?	?	首飾、臂釧、ドーティ	立像	なし	世自在(立像)	中尊の右側。
(上にあげる)	?		立像	?	世自在(立像)	中尊の左側

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
23	Indian Mus	Foucher 1900-1905 Fig. 12	Dt. Magadha			1	2
24	Indian Mus	76YM 大67-4 MY83 小153-6			炎髪	1	2
25	Sarnath Mus	MY83 小140-26			炎髪	1	2
26	Nalanda Mus	76YM 大62-5		c. 12 c (Mus)	炎髪	1	2
27	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCCXLII(A)			忿怒相	1	2?

### 3.11 財宝神ジャンバラ

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
1	Indian Mus	MY83 小151-14 〔図13〕			髪髻冠 化仏	1	2
2	Lucknow Mus	76YM 小89-13 〔図14〕		c. 9 c	—	—	2
3	Ratnagiri	Mitra 1981 Pl. CXXI(B)	Ratnagiri		髪髻冠 耳飾	1	2

持物(右)	持物(左)	装身具等	姿勢	座・乗	脇侍	備考
(上にあげる)	?	鼓腹、短軀	立像	なし	観自在(立像)	中尊の左側、中尊と脇侍の女尊との間に立つ。
(正面に杖を立て両手をその上におく)		鼓腹、短軀	坐像	なし	観自在(坐像)	中尊の左下方の台座に表現される。右膝を立てて坐る。
(上にあげる)	(足のの上におく)	鼓腹	坐像	なし	観自在(坐像)	台座左端に表現される。
剣	絹索	首飾	坐像(?)	なし	観自在(坐像)	中尊の左側。下半身は中尊の膝によって隠れる。
(胸の前で組む)			立像	なし	観自在(?) (坐像)	中尊の左下方の台座に表現される。中尊の上半身は欠損。

持物(右)	持物(左)	装身具等	姿勢	座	乗物	脇侍	備考
-	マンゲース(口から宝石を吐き出す)	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、腰飾、足輪、鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	左右に二男尊	卵形の頭光 左右に二飛天。 台座に九個の壺の浮彫(左足をそのひとつの上におく)。
樹果	マンゲース(口から宝石を吐き出す)	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、腰飾、足輪、 けむり状の装身具、鼓腹	遊戯座	一重蓮華	なし	なし	台座にほら貝と蓮台の浮彫。
樹果	マンゲース(口から宝石を吐き出す)	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、腰飾、足輪、 聖紐、鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	光背。 頭の左右に壺の浮彫。台座に八個の壺の浮彫とその両端に獅子の浮彫。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
4	不明	Willeys 1963 p.18			髪髻冠 化仏(?)	1	2
5	Indian Mus	Foucher 1900-1905 Fig. 20	Dt. Maghadha		髪髻冠	1	2
6	Nalanda Mus	76YM 小111-28			髪髻冠 化仏	1	2
7	Bodh Gaya Mus	76YM 小113-10			髪髻冠 耳飾 (顔の表面は欠損)	1	2
8	Indian Mus	76YM 小123-17	Dt. Bihar	c. 11 c (Mus)	髪髻冠	1	2
9	Indian Mus	76YM 小123-31			髪髻冠 耳飾	1	2
10	Patna Mus	76YM 小105-5			髪髻冠	1	2
11	Nalanda Mus	76YM 小112-21			(頭の上 部は欠損)	1	2
12	Nalanda Mus	76YM 小111-31			髪髻冠	1	2



持物（右）	持物（左）	装身具等	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
樹果	マンガース(?)	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、腰飾、足輪、聖紐、鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	龕の中におかれる。
樹果	マンガース(?)	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	舟形の火炎光背。頭の左右に壺の浮彫。
樹果(?)	蓮華	首飾、瓔珞、腕釧、聖紐	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	円形の火炎光背。上部に傘蓋。方形の台座。
樹果(?)	—	首飾、足輪、臂釧、腕釧、鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	火炎頭光。左右に直立する二頭の獅子の浮彫。台座には華鬘を持った供養者と二匹の獅子の浮彫。
樹果	—	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、腰飾、足輪、鼓腹	遊戯座	花模様のついた台	なし	なし	右足の下には小さな蓮台。火炎光背。
樹果	—	首飾、聖紐、腰飾、鼓腹	遊戯座		なし	なし	台座に銘文。MusはMañjusrī-kumārabhūtaとする。
樹果	—	首飾、臂釧、腕釧、鼓腹	遊戯座		なし	なし	円形の火炎頭光。背板の左右に獅子。台座に供養者と獅子。MusはKuberaとする。
樹果	—	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、鼓腹	遊戯座		なし	なし	台座の左半分と光背のほとんどは欠損。
樹果	?	首飾、瓔珞、臂釧、腕釧、鼓腹	遊戯座		なし	なし	

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
13	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCXCV(B)	Ratnagiri			1	2
14	現地(Bodh Gaya)	Benisti 1981 Fig. 150	Bodh Gaya		髮髻冠	1	2
15	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCXV(B)	Ratnagiri			1	2
16	Dacca Mus	Bhattachali 1929 Pl. XI(a)		2.2 in × 1.5 in	髮髻冠	1	2
17	Dacca Mus	Bhattachali 1929 Pl. XI(b)		2 in ht.		1	2
18	Dacca Mus	Bhattachali 1929 Pl. XI(c)		2 in ht. black stone	髮髻冠 耳飾	1	2
19	Dacca Mus	Bhattachali 1929 Pl. XI(d)		10 in ht.	髮髻冠 耳飾	1	2
20	Seattle Art Mus	Encyclopedia of World Art, XI Pl. 8(left)	Nalanda	Copper 7.3 in ht. 9-10 c	髮髻冠	1	2
21	Indian Mus	MY83 小152-36			(頭部は 欠損)	1	2
22	Nalanda Mus	76YM 小109-21			髮髻冠	1	2
23	Indian Mus	MY83 小150-38				1	2

持物（右）	持物（左）	装身具等	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
？	？	鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	像の表面は摩滅。
樹果	？	首飾、 臂釧、腕釧 鼓腹	遊戯座		なし	なし	台座に供養者と二個 の壺の浮彫。
？	？	鼓腹	遊戯座		なし	なし	楯石の中の断片。
樹果	マンゲ ース（口か ら宝石を 吐き出す）	首飾、瓔珞、 臂釧、腕釧、 聖紐 鼓腹	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	
？	？	鼓腹	賢座		なし	なし	背面に銘文。 表面はほとんど摩滅。
樹果	マンゲ ース（口か ら宝石を 吐き出す）	首飾、瓔珞、 臂釧、腕釧、 聖紐、足輪	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	台座に二供養者。
樹果	マンゲ ース（口か ら宝石を 吐き出す）	首飾、瓔珞、 臂釧、腕釧、 腰飾、足輪	遊戯座	二重蓮華	なし	なし	右足の下に小さな台。
—	？	首飾、瓔珞、 臂釧、腰飾	半跏趺 坐	一重蓮華	なし	なし	蛇の傘蓋。頭光。 方形台座。
樹果(?)	？	首飾、瓔珞、 臂釧、腕釧 足輪 鼓腹	賢坐(?)	二重蓮華	なし	なし	頭部、左上腕部欠 損。
樹果	マンゲ ース(?)	首飾、瓔珞、 鼓腹	賢坐		なし	なし	円形の頭光。 MusはKuberaとする。
？	？	首飾、瓔珞、 臂釧 鼓腹	賢坐		なし	なし	円形の頭光。

No.	所蔵・所在	出典	出土地	データ	頭飾等	面	臂
24	現地(Ratnagiri)	Mitra 1983 Pl. CCLV(A)	Ratnagiri		—	1	2
25	Patna Mus	76YM 小105-11			髪髻冠	1	2

## 謝 辞

本研究は、名古屋大学文学部助教授宮治昭先生主催の共同研究「パーラ朝美術に関する研究」の成果の一部である。内容、形式に関して宮治先生からは多大なご指導ご助言をいただきました。ここに謝意を表します。

なお、写真図版はすべて宮治先生と名古屋芸術大学教授山田耕二先生の撮影によるものである。貴重な資料を貸与いただき、本論文での使用を快諾下さった両先生に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- Bandyopadhyay, B. (1981): *Metal Sculptures of Eastern India*. Delhi, Sundeep Publishers.
- Banerji, Rakhil Das (1933): *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture*.  
Archaeological Survey of India, New Imperial Series No. 47, Delhi, Manager of Publications.
- Bénisti, Mireille (1981): *Contribution à l'étude du stūpa bouddhique Indien: Les stūpa mineurs de Bodh-gayā et de Ratnagiri*, 2 vols.. Paris, École Française d'Extrême-Orient.
- Bhattacharyya, B. (1968): *An Introduction to Buddhist Iconography*. Calcutta, Firma K. L. Mukhopadhyay (repr.).
- Bhattacharyya, B. (1972): *Niṣpannayogāvaī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta*. G. O. S. No. 109. Baroda, Oriental Institute (repr.).
- Bhattacharyya, Dipak Chandra (1974): *Tantric Buddhist Iconographic Sources*. Delhi, Mushiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd..
- Bhattacharyya, Dipak Chandra (1978): *Studies in Buddhist Iconography*. New Delhi, Manohar.

持物（右）	持物（左）	装身具等	姿 勢	座	乗物	脇侍	備 考
—	—	—	遊戯坐	二重蓮華	なし	女尊	背景と台座に三人の 供養者の浮彫。 全体的に表面が摩滅 している。
?	—	首飾、聖紐	遊戯坐		なし	女尊	上部に仏坐像（定印 を結ぶ）。 基壇部に六つの尊像 の浮彫。 女尊はVasudharāか?

Bhattachali, Nalini Kanta (1929): *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculptures in the Dacca Museum*. Dacca, Dacca Museum Committee.

Dutt, Sukumar (1962): *Buddhist Monks and Monasteries of India*. London, George Allen and Unwin.

Foucher, A. (1900–1905): *Étude sur l'iconographie bouddhique de l'Inde, d'après des documents nouveaux*. 2 vols. Bibliothèque de l'école des hautes études, Sciences religieuses vol. 3, pts. I–II, Paris, Ernest Leroux.

Goetz, Herman (1966): Pāla-Sena Schools. *Encyclopedia of World Arts* vol. XI, pp. 21–37.

Gupta, Palmeshwari Lal, ed (1965): *Patna Museum Catalogue of Antiquities*. Patna, Patna Museum.

逸見梅栄 (1935): 印度に於ける礼拝像の形式研究. 東洋文庫.

Huntington, Susan L. (1984): *The "Pāla-Sena" Schools of Sculpture*. Studies in South Asian Culture vol. X, Leiden, Brill.

Huntington, Susan L. (1985): *The Art of Ancient India*. Tokyo, John Weatherhill Inc.

Liebert, Göesta (1976): *Iconographic Dictionary of the Indian Religions*. Studies in South Asian Culture vol. V, Leiden, Brill.

Majumdar, M. R. (1961): A Kubera from Kavi. *Lalit Kalā*, 9, 58.

Mallmann, Marie-Térèse de (1948): Un point d'iconographie indo-javanaise, Khasarpana et Amoghapāśa. *Artibus Asiae*, 11 (3), 176–188.

Mallmann, Marie-Térèse de (1964): Divinités hindoues dans le Tantrisme bouddhique. *Arts Asiatiques*, 10, 67–86.

Mallmann, Marie-Térèse de (1975): *Introduction a l'iconographie du tantrisme bouddhique*. Bibliothèque du Centre Recherches sur l'Asie Centrale et la Haute Asie vol. 1. Paris.

- Meisezahl, R. O. (1980): *Geist und Ikonographie des Vajrayāna-Buddhism*. Sankt Augustin: VGH Wissenschaftsverlag.
- Mitra, Debala (1978): *Bronzes from Achutrajpur, Orissa*. Delhi, Agam Kala Prakashan.
- Mitra, Debala (1981): *Ratnagiri* (1958-61), vol. I. *Memories of the Archaeological Survey of India*, No. 80. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Mitra, Debala (1983): *Ratnagiri* (1958-61), vol. II. *Memories of the Archaeological Survey of India*, No. 80. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- 宮治 昭 (1980): インド美術史. 吉川弘文館.
- 中村 元 (1980): ブッダの世界. 学習研究社.
- Sahu, N. K. (1958): *Buddhism in Orissa*. Cuttak, Utkal University.
- Saraswati, S. K. (1977): *Tantrayāna Art an Album*. Calcutta, Asiatic Society.
- 佐和隆研 (1982): 密教美術の原像. 法蔵館
- Schroeder, Ulrich von (1981): *Indo-Tibetan Bronzes*. Hong Kong, Visual Dharma Publications Ltd.
- Sinha, Kamini (1983): *The Early Bronzes of Bihar*. New Delhi, Ramanand Vidya Bhavan.
- 立川武蔵 (1987): 曼荼羅の神々. ありな書房.
- Willetts, William (1963): An 8th Century Buddhist Monastic Foundation. *Oriental Art*, 9 (1), 15-21.
- 頼富本宏 (1985): マンダラの仏たち. 東京美術.

(付記)

本稿脱稿後、頼富本宏氏による『密教仏の研究』（法蔵館）が刊行された。パーラ朝の造型作品の図版が多数含まれる大著であるが、本稿では残念ながら参照しえなかった。



図2. マハーカール



図1. トライローキヤヴィジャヤ



図3. ヤマーンタカ

京都府立総合資料館  
YAMANTAKA  
14



図4. サンゴアラ





図6. ハヤグリーヴァ



図5. サンヴァラ



図8. ヘーヴァヴァ



図7. ヘーニカ

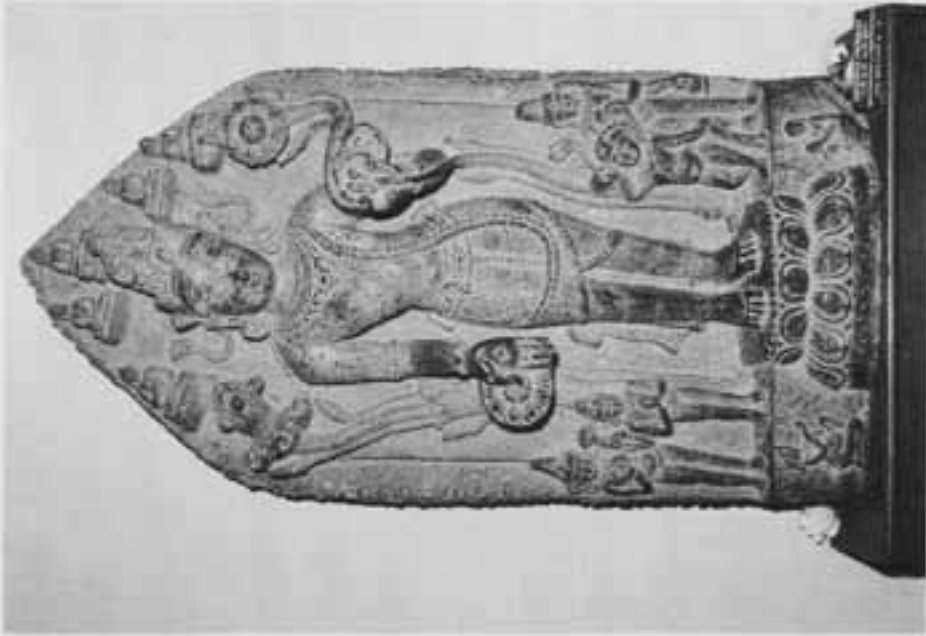


図9. カサルパナ観自在立像  
(脇侍は左よりタラー、スダナクマラー、  
ハヤグリーヴァ、プリクティイー)



図10. カサルパナ観自在坐像



図11. 図10部分 (ハヤグリーヴァ)



図12. 不空罽素親自在立像 (左脇侍はハヤグリーヴァ)



図14. ガネーシャ



図13. ガネーシャ